針川師作は人を待っている。

そこはもう六十過ぎのマスターが切り盛りする喫茶店だった。まさに古き良き、という感じで、店内にはレトロな雰囲気が充満している。極力電灯を排した店内は、しかし南の通りに面する大きなガラス戸を通して入る日光によってそれなりの明るさがある。

その窓辺のボックス席にひとりで座り、ホットコーヒーを飲みながら図書館で借りた本を読んでいる。それは紅葉の写真集だった。季節は秋だった。

「もうこの街の住人だねえ、すっかりと」

マスターがおかわり用のポッドを持ってやってきた。師作は「お願いします」と空になったカップを差し出す。それは手に持ってみると見た目以上に想い、寸胴のような形のものだった。

マスターはカップを手に取り、洗練された技術を以って高い位置から見事に注いだ。師作は何度も見ているそれを、しかし何度見ても感嘆の声を密やかに上げた。それは本当に密やかで、まるで蚊の鳴くような大きさだった。

「何度見ても驚いてくれるねえ」

マスターには聞こえていたようで、好々爺然とした表情を浮かべた。

「何度見たって見事ですから」

「うれしいねえ。師作みたいな若い子が常連さんになってくれてうれしいよ」

「それは、どうも」

気恥ずかしさのある返答だった。

「それで、今日は何読んでるの？」

「……暇なんですか？」

「見ての通りだよ」

店内には小さくBGMが流れている。それは何にも遮られることなくよく聞こえる。ふたりが黙ってしまえば他に話し声はなかった。つまり、客は師作だけだった。

「貸し切りですね」

「そうなんだよ」

「でも、あと少しでもうひとり来ますよ」

「果歩ちゃん？」

「はい。昼食を食べていないそうで、ここでオムライスを食べたいそうです」

「了解」

逡巡の後、マスターが訊ねた。

「お付き合いしてるの？」

「してませんよ。僕にはもったいない」

「そう」

意外にもあっけらかんとしていた。

「あ、来たみたいだ」
師作は声につられてマスターと同じ方を見た。
「見間違いだったみたい」
師作をマスターはわらった。彼は老人でありながらこどものようでもある目の前の男のことを一人の人間として気に入っていた。からかわれた彼もまた、わらった。
「本当に来た」
マスターは驚いた様子で言った。
「えっ？」
顔を上げるのと、ガラス戸の前を人が走って通り過ぎたのは同時だった。
二時間ぶりに、入り口の呼び鈴が鳴った。二時間前はおだやかに、今回はせわしなく。
「マスター、オムライスのセットをひとつ」
入ると同時に響いた注文に、マスターは席を立って答える。
「はいよー」
「大盛りでおねがい」
通路ですれ違いながらかの客は注文を追加した。
「よっぽどお腹減ってるんだ？」
「最後に食べたの昨晩だから」
ちょうど、振り子時計が十四時を指し、コーンコーンと音を鳴らした。機械仕掛けのそれは、かつては窓から鳥を披露していたが今はもう鳥そのものが排されてしまっている。
「おつかれ」
「ありがとう」
彼女は、座ると同時に師作から差し出されたコップ受け取りひと息に飲み干した。師作はまた水を注いだ。彼女は再び「ありがとう」と言った。
黛果歩は友人の手元にある本に目をつけた。
「秋の写真集？」
「まあ、そう。主に紅葉の」
彼はパラパラとめくりながら答えた。
「いいね」
切れよい肯定だった。しかし次の句はそうもいかなかった。
「今度…観に、行く？」
「……ここらへんって観れる場所あるの？」
「あるよ。山の方の、電車で行けるところに」
「行きたい」
「じゃ、決まりね」

「ああ」
「でも」
「？」
彼は目だけで問う。
「意外だね。てっきり去年とかにもう行ってるものだと」
「去年はまだこの街に慣れてなかったし、街を探索するのに忙しかったからね」
「そっか、まだ今年で二年目だもんね」
「――――」
師作は思わず口を噤み、言葉を返すのを忘れかけた。その様子に果歩は首を傾げる。彼女が見る彼の顔はあまりにも神妙で、それは初めて見るものだった。
「師作くん…？」
「ん？　なに？」
師作は朗らかさを多分に含んだいつも通りの表情を果歩に向けた。彼女はどこか安心した。
「……紅葉はいつ観に行こうか？　見頃は十一月頭から半ばくらいだけど」
「せっかくだから一番きれいな頃に観に行こう」
「じゃあ、紅葉の情報を見ながら決めよっか」
「ああ」
カウンター内のキッチンから漂ってきた良い匂いに、ふたりは同時に反応した。そこでは老人が鍋を大きく振っていた。漂ってきたのは鉄鍋から香り立つバターとケチャップの匂いだった。空腹の彼女は反射的に胃袋を鳴らした。
「おなかすいた」
「相変わらずいい匂いだなあ。ずっと食べていたいな」
果歩は師作の横顔を静かに見た。彼女は彼の発した言葉の後半が気になってついそうしたが、顔色を変えることも自分に気付くこともない師作に、形容し難い寂しさを覚えた。
「ちょっとお花摘みに」
そう言って席を立つ彼女に師作は「はーい」と何も気付かないまま応えた。そして読書を再開した。やがてすぐに、マスターがオムライスとオニオンスープを配膳しに来た。マスターはそれらを置き、立ったままぽつりともらした。
「デート中だというのに、なんだか浮かない顔だね」
「……この街に逃げてきてからもう二年も経つな、と思いまして」
老人は若者の言葉の真意や詳細を何も知らない。だから当然、訊きたさはあった。しかしそれでも、物憂げな若者に何も訊かなかった。年の功がそうさせた。
「そうだね」とだけおだやかに応えた。
その程度の反応が、師作にはありがたかった。

× × ×

師作はおだやかな毎日を過ごしている。彼の起床時刻は四時五十五分。そんな朝早くに起きて何をするのかといえば弁当作りと自体重トレーニングと有酸素運動である。そしてそれらが終われば本を読む。十一時頃までそうして過ごし、昼前には弁当などをもって街へ出て、どこかで包みを広げて昼食を摂る。食事を摂る場所は時には他の街だったりする。彼は気の向くままに歩き、気に入った場所に腰を落ち着けた。帰りには必ず図書館で映画を観た。日によっては和菓子店か洋菓子店に立ち寄ってから帰宅した。そして夕方以降もほとんど読書して過ごし、夜は二十二時には床に就いた。もちろん毎日がこの通りではないし、時には電車や車で出かけることもするが、今現在の日常とはこのようなものだった。

しかし、一年十ヵ月前まではその通りではない。かつてはあまりにも多忙だった。その労働の日々は搾取の日々ではなく相応の対価を得る日々ではあったが、あまりにも心身を削り過ぎた。一年十ヵ月とは自覚するまでにかかった年月だった。限界がくるのはあまりにも必然的だった。自覚したのは一通りの仕事を終え、腰を落ち着けたときだった。考える余裕もない動き続けていた日々に一区切りつき、考える間ができた瞬間から、彼は動けなくなった。金は充分にあった。今すぐに仕事を辞めても何の問題もないくらいの額が。彼はそうして都を離れた。

師作はいまの生活をとてもとても気に入っている。貯金はまだ充分にあり、仕事もある。行きつけの店もあり、知人も増え、同年代の女性すらいる。空は澄んでいて、遥かの峰には息を呑む。食事はうまく、酒も同じく。日本酒もあり、ウイスキーもあり、ワインもある。ワインにはこの街に来てからハマった。いまや、小型だがワインセラーを持っている。心身ともに充実している。持ち前の対人関係のうまさや魅力によって居場所すらある。

しかし最近、考える時間が増えた。一日の多くの時間を読書に注ぎ始めてから今日までに、引っ越す以前に溜めていたほとんどの本を読み終え、また図書館で借りた本もあっという間に読み終えてしまうため、空いた時間に『先』のことを考えるようになった。『先』のこととは要するに、街に根付くか都に戻るかの判断を決するということだ。

彼自身、思考にうっとおしさを覚えていた。考えなければいいだけなのだが、彼にはそれが難しかった。考えなければならないことだとも理解していたから、考えてしまえばとめられなかった。それでもなお、否、だからこそ、うっとおしさは拭えない。

考える。

この『先』どうするか？ということについてではなく、どのようにしたら考えなくて済むのか、ということについて。答えは布団に入って天上の木目を見つめている間に出た。

「明日、本買いに行こう」

自分に言い聞かせるようにそうつぶやいて目を閉じた途端、彼は深く眠りに着いた。

× × ×

早速翌日に師作が赴いたのは学生の頃によく通った古本とカレーの町だった。
天気は秋晴れ。気温は二十二度。風はほぼなく、空気は冷ややか。平日の十時過ぎである、人の往来は少ない。広く感じる通りによって師作は密やかに優越感を抱く。しばらく連絡の取っていない兄が付近で働いていることを思い出し、それもすぐに引っ込んだ。
彼は通りの奥の方の店から順に入ることにした。

腹の虫が鳴いた。
そこで初めて時間を確認した。
「もう十三時か」
師作は両手にそれぞれひとつずつ紙袋を持っている。もうずいぶんと買い付けたようだったが、まだ買い物を続けるつもりでいた。そのためには空腹を無視するわけにはいかなかった。
「さて、空いていればいいけど」
そう言った彼が向かったのは古本屋が続く通りのひとつ裏の通りにあるカレー屋だ。
不安は的中し、五人ほどが並んでいた。普段であればすぐに見切り着けてよその店なりコンビニなりに向かってしまうが、その店のカレーにありつくまで五人待ちで済むというのはあまりにもめずらしかった。さらに言えばひさしぶりのカレーにありつくためであれば七人待ちまで許容しようと決めていた。
そうして二十分は待つだろうと思って並んだが、五人組の大学生がすぐに出てきたおかげであっという間に先頭になった。その幸運な出来事に良くした師作は買ったばかりの本を読みながら待った。
「あら、ひとりだけ」
つぶやきが聞こえた。本への集中は途切れず、師作の顔は文章に向けられたまま。続いた独り言に耳だけが向けられる。
「ひっさしぶりー、ひっさしぶりのー、うまうまカレー♪」
独り言というよりも、あまりにも単純な即席の歌を聴いた瞬間、ページをめくる手が止まった。師作の脳裏に知り合いの顔が浮かんでいた。そんなまさか、という言葉が脳内に強く鳴り響いた。反射的にそちらを見て確かめかけたが、どうにか堪えた。予感が外れればいいが、もし仮に当たってしまった場合、めんどうなことになるのは目に見えていた。
しかし、無駄だった。
「……師作？」
ささやかな抵抗として、師作はほんの僅かに顔を背けた。

「え、師作だよね」
動かず、何も発さない。しかしそんな他人のふりも無理があった。
王子美嘉は多少の他人への迷惑はまるで勘定しないタチだった。
彼女は師作の顔の真下に顔を入れてきて、見上げて顔を確かめた。
「ひさしぶり」
何も変わらない笑顔を懐かしく思いつつ、師作はげんなりとした。
「そんなイヤな顔しないでよ～」
「……嫌な偶然だ」
「嬉しい偶然だよっ」
「なんでここにいんの？」
「作監の素材回収」
「カレーで汚れたらどうすんだよ。帰れ」
「これからでーす」
馬鹿にした言い方だった。
一方で、師作の物言いも言葉遣いも気付けば棘のあるものになっていた。
はああぁ、と師作は深くため息を吐く。
「なんでこんな日に会っちまうんだよ……」
「私はうれしいよ？」
手本のような笑顔だった。彼は彼女のそれに、今度ははっきりと嫌悪感を覚える。
嫌悪感は師作にその場から立ち去らせようとした、が。
「ちょいちょいどこいくの」
「他の店だよ」
「ここおいしいじゃん、知ってるでしょ？」
「……嫌だ」
「えー、一緒に食べようよ」
「ヤだって」
「奢るから」
「無理」
「ひさしぶりにいろいろ話そうよ」
「……なんで」
「なんでって、あれからひとりで頑張ってるんだよ、私も」
ひとりで、という言葉が師作の意識に強く引っかかった。かつてはふたりであり、その片割れが自分だった。畢竟、ひとりにしたのは自分だった。罪の意識で顔が曇る。
「べつに怒っちゃいないし、……ていうか私のせいみたいなところがあるのも自覚してる」

「……そんなことはない」
「……そんなこと言ってくれるんだ。嬉しいね」
目を細めて美嘉は笑う。
「でも、僕は」
「まあまあまあ、続きは中で一緒に食べながら話そうよ！　おねがい、ね？」
「……わかったよ、色々聞かせてよ」
師作がそう答えたのは諦めもあったが、それだけではないのもまた確かだった。
やがて店員に案内されるまで、ふたりは最近観た映画の話で盛り上がった。
四人掛けのボックス席にふたりは通された。
席に着いてすぐに注文を済ませてから、美嘉が訊いた。
「それで、あれからどうしたの？」
「東京から逃げた」
「逃げた？」
「ああ」
「……どこに？」
「空気の澄んだ地方都市」
「ふぅん」
不服に感じていることをまるで隠さない声色だった。顔もまた不快感でいっぱいになった。
「そこで何してるの？」
「何も」
「何も？　仕事は？」
「依頼があればたまに」
「あなたが何も書いてないの？」
「書いてるっつたろ」
「毎日じゃないんでしょ」
「それはな。その代わりに映画観たり本読んだりしてる」
「ああそっか、それで古い映画観てるんだ」
ロッキー、ランボー、スターウォーズ、それら三作品名が師作の口から出るのを美嘉は並んでいるときに聞いていた。やけに古い映画を今さら見てるな、と思っていたが、彼女は特に訊くようなことでもないかとスルーしていた。
「そうだな。今度はやっと黒澤映画手をつけられるよ」
「で、さ」と逸れかけた話を美嘉が戻す。
「本当に、今はそんなのんびりスローライフ送ってるの？」
「ああ、金に困ってないからな」

「この先もそうするつもりじゃないでしょ？」
「……どうだろうな。いま悩んでるよ」
「悩む？　何を」
「今の場所に住み続けるかどうか」
「ああ、なんだ……てっきり書き続けるかどうかだと」
「……」
「なんで黙るの？」
なおも沈黙を貫こうとするが、「ねえ」と強めに詰められる。
師作は口の端からゆっくりと落とすように言った。
「趣味としては書くだろうが、仕事としてかはわからんよ」
「は…？　ありえないでしょ、あなたに選択肢があるとでも？」
「あるさ」
「ないよ。どういう生活してるかわからないけど、貯金崩して暮らしてるんでしょ、いま」
「ああ」
「二年近くだらだらと暮らせるだけの金額を稼げたのはなんでだと思ってるの？」
二十代の若者が、だよ。と付け加えられる。
詰められる師作は明言しないまま弱気を口にする。
「……だとしても、あんな目に遭うのはもういやだ」
「同情には値するよ。きっと間違いなく私でも逃げる。むしろ最後までやり切ったキミを私は尊敬するよ。だから許せてる」
「でも」と息を継いで言葉を続ける。
「あんな目に遭って悩んでるのなら、それがほとんど答えなんじゃないの？」
「さあな」
それはおそらく強がりに端を発するものだった。
「おまたせしましたー」と店員がやって来る。大盛りカレーと普通盛りカレーが提供された。
「相変わらずのいい匂いだ……」
師作が手で匂いをかき立てながら幸せそうに言う。
「相変わらずいい顔するね。こっちに戻ってくれば毎日だって食べれるよ」
「毎日はいい。それに向こうにだっておいしいものは多くある」
美嘉は黙ってカレーに手をつけた。今度はふたりとも黙々と食した。
先に食べ終えた彼女が訊いた。
「あの環境をもう一度、とは思わないの？」
「思わないね」
「でも、もう一度あれだけのものを、とは思うでしょ」

師作は何も言わなかった。が、苦しさの中に確かな充足があった日々を思い出していた。

× × ×

「どこが好きなの？」

黛果歩についに訊いたのはマスターだった。店内にはやはりいつかと同じように他に誰もいなかった。その質問には主語がなかったが、マスターの確信ある目つきによって何を訊かれているかをすぐに察した。

「いろいろあるけど、一番は大変なことも楽しめるところで、二番目はささいなことでもすごい楽しむところです」

「……へえ」

意外そうにそう言ったっきり、マスターは何も言わなかった。

その様子に果歩は口を尖らせる。

「なんですか、自分から訊いておいて」

「いや、ごまかすかと」

「ばれてこまることでもないと思って接していたので」

「なるほどなるほど……大人になったねぇ」

「もう二十七ですから」

ふふん、と胸を張りながら言った果歩に、マスターは無常な言葉を突きつけた。

「でも付き合ってはないんでしょ？」

それは彼女にとって以前からの懸案事項だった。わかりやすく口が鈍った。

「それは、まあ」

「他に女性いないの？」

「いるんですか？」

「見たことはないけど」

「じゃあ――」

「でも昨日から東京に出かけてるのって、そういうことじゃないの？」

「……だとしても関係ないですよ」

「横恋慕になったらがんばれー」

グラスを拭きながらの間延びした言動だったが、目はやさしくおだやかであった。

果歩はぬるくなったコーヒーをちびりと飲んでからぽつりと訊ねた。

「都から引っ越してきたんですよね、師作くんって」

「なに、不安になった？」

「違います。意地悪言わないで下さい」

「ごめんなさい。…で、そうだよ」
マスターは思い出す。当人が自分の店によく通うようになってくれた頃、雑談の中でそんな話をしていた。同時に、街に来たばかりの頃はずっと暗い顔をしていたことも。
「理由はなにか聞いてます？」
「知らないねえ」
「そっかあ……」
果歩は溜め息を吐く様につぶやいた。
今とさっきとでまったく違う様子を老人はわらった。
「不安になってるじゃん」
「……うん」
一転した弱気な態度にマスターはやさしくわらう。
「でも、紅葉見に行くんでしょ？」
「……うん、そうだけど」
「彼はそんな、誰彼構わずに出かけるような人物じゃないとおもうけどな」
「わたしもそう思いますけど……思いたいですけど……」
信じ切れないのは、知らないことがある、という事実があるためだった。
「わからないことはわからないものとして置いておくことも必要だよ。本人がどれだけ真面目な顔で何を言ったとしても、自分がめにしていないことはあくまでも伝聞にすぎないんだから」
「『わからないことはわからないものとして置いておくことも必要』……か……」
彼女は知的な老人の言葉を咀嚼する。理解はできなかった。ただ今の自分に必要なもののような気がした。
彼女は黙し、考え込んだ。それは呼び鈴が鳴るまで続いた。その音がして、顔を上げた。
待ちわびた師作のその表情は、聞きたくない何かを今にも言い出しそうなものだった。